

帰国子女のホスト国適応と母国再適応

—アメリカからの帰国子女—

小島奈々恵・深田博己

Kikokushijo's host country adjustment and home country re-adjustment:

Kikokushijo from America

Nanae Kojima and Hiromi Fukada

ホスト国適応に比べて母国再適応の難しさを指摘する先行研究に反して、小島・深田(2011)の帰国子女研究では、滞在中のホスト国適応に比べて、帰国後の母国再適応が容易であったことが示された。この結果は、帰国後の適応プロセスを考慮したとき、帰国してからの母国での生活期間(滞在期間)が約18年と長いことによる影響ではないかと推測された。そこで、本研究では、帰国後の母国での生活期間を統制するため、帰国後の母国での滞在期間が比較的短い(約5年)帰国子女を対象に、帰国子女の適応と適応の規定因について再検討した。その結果、滞在中のホスト国(アメリカ)適応と帰国後の母国(日本)再適応に差はみられなかった。本研究の結果と先行研究の結果の間接的な比較から、帰国後の母国での生活期間の長さは、帰国後の母国再適応に影響している可能性が示唆された。

キーワード：ホスト国適応，母国再適応，帰国子女

問 題

近年、海外在留子女、つまり帰国子女予備軍の数は増加傾向にあり(外務省領事局政策課, 2010; 文部科学省, 2004)、毎年10,000名以上の帰国子女が帰国している(文部科学省, 2004, 2010)。国際化に伴い、帰国子女は目立った存在でなくなり、帰国子女を扱う研究は見当たらなくなったが、研究の継続の重要性が増してきたと言える。さらに、時代の変化と共に帰国子女の捉え方は変わっており(グッドマン, 2003)、その変化と共に帰国子女自身も変化していると推測できるので、現時点での帰国子女研究の必要性が高まる。

小島・深田(2011)は、諸外国からの帰国子女を対象に、回想法による1回のWeb調査を実施し、出国前から帰国後までの適応の変化、各時期の適応に影響する要因について検討した。その結果、海外滞在中のホスト国適応に比べて、帰国後の母国再適応に、帰国子女は優れていた。ホスト国適応に比べて、母国再適応の難しさを指摘しているGullahorn & Gullahorn(1963)、Martin(1984)、箕

浦（1988）とは異なる結果が得られた。

Uカーブ仮説やWカーブ仮説（Gullahorn & Gullahorn, 1963）によると、移住者は①高揚的で楽観的な時期、②不満、絶望、混乱の時期、③確信や満足の時期、の適応過程を辿る。さらに、箕浦（1988）は、①帰国後1年は、母国である日本を外国のように感じ、表面的な違いに対応することに追われ、②帰国後2年半から3年が経過した頃に、“本質的な違い”が意識され出す、と帰国子女の再適応プロセスを2段階で説明している。この“本質的な違い”により、帰国子女は心理的不適応を起こすと推察される。同様に、帰国子女の適応を外面的な適応と内面的な適応の2つのレベルで検討すべきと江淵（1988）は述べている。箕浦（1988）の“本質的な違い”が意識されるために生じる心理的不適応が起こる2段階目は、Uカーブ仮説やWカーブ仮説（Gullahorn & Gullahorn, 1963）の②不満、絶望、混乱の時期と重なると考えられ、箕浦（1988）は帰国後2年半から3年が経過した頃と具体的に時期を示している。よって、帰国後の平均滞在期間が約18年経過している小島・深田（2011）の帰国子女が、②不満、絶望、混乱の時期を終え、③確信や満足の時期にいると推測され、帰国してからの母国での生活期間（滞在期間）の長さが結果に影響したのではないかと推測された。

また、小島・深田（2011）の対象者は、諸外国からの帰国子女であり、ホスト国での平均滞在期間（約4年半）は帰国後の滞在期間より長かった。調査時の年齢は36.1歳（ $SD = 13.4$ ）であり、小島・深田（2011）の対象者は、調査時の年齢と滞在先において、対象者の性質が統制されていなかったと言える。

本研究では、小島・深田（2011）が用いたデータに比べて、質的に優れたデータを用いて、帰国子女の適応と適応の規定因について再検討する。具体的には、帰国後の母国での生活期間の影響を統制するため、帰国してからの滞在期間が比較的短い帰国子女を対象者を限定した。さらに、ホスト国を1カ国（アメリカ）に限定し、ホスト国での滞在期間が帰国してからの滞在期間より長く、調査時の年齢に大きな差がない帰国子女とした。小島・深田（2011）と同様に、回想法による調査を実施したが、以上のような性質を備えた帰国子女を調査対象とすることで、精度の高い研究結果が得られる。

方 法

調査対象者 小島・深田（2011）は、日本国籍を有し、親の都合によりおよそ2年以上海外で生活し、海外で教育を受けた者を帰国子女とし、スクリーニングを行った。本研究では、その手続きを簡略化し、調査対象者に、アメリカに行くことになった理由を尋ねた。帰国後の調査対象者20名（男性6名、女性13名、不明1名）のうち、17名が「親の仕事の都合」、3名が「留学」と回答した。

本研究では、留学を出国理由にした3名を除いた17名（男性5名、女性12名；平均年齢22.94歳、 $SD = 0.90$ ）を分析対象者とした。出国時の平均年齢は10.18歳（ $SD = 5.08$ ）、アメリカでの平均滞在期間は92.76カ月（ $SD = 57.12$ ）だった。また、帰国時の平均年齢は17.94歳（ $SD = 0.93$ ）、帰国後の母国（日本）での平均滞在期間は61.63カ月（ $SD = 12.51$ ）だった。

調査手続きと調査時期 調査者と調査協力者により、質問紙は、直接もしくは電子メールに添付して、配布・回収された。アメリカ滞在中（回想法）と帰国後の2時期について、1回の調査を実施した。また、調査時期は2002年10月であった。

調査項目 調査項目は、小島・深田（2011）と類似しているが、小島・深田（2011）の研究と本研究の大きな相違点は、小島・深田（2011）の“日本人との接触”“外国人との接触”“日本人からのサポート”“外国人からのサポート”を、本研究では“同エスニシティとの接触”“異エスニシティとの接触”“同エスニシティからのサポート”“異エスニシティからのサポート”とした点である。具体的には、滞在中の“日本人”と帰国後の“帰国子女”を“同エスニシティ”とし、滞在中の“アメリカ人”と帰国後の“帰国子女ではない日本人”を“異エスニシティ”とした。

滞在中と帰国後の2時期それぞれについて、①適応、②同エスニシティとの接触、③異エスニシティとの接触、④日本文化との接触、⑤アメリカ文化との接触、⑥同エスニシティからのサポート、⑦異エスニシティからのサポート、⑧日本に対する感情的評価、⑨アメリカに対する感情的評価について回答を求めた（Table 1）。2項目以上で測定した変数については、項目平均をその変数の得点とした（Table 2）。なお、以上の項目以外に他の項目も調査には含まれていたが、今回の分析には使用しなかったため、詳細は省略する。

結 果

適応および影響要因の変化 各変数の平均値、標準偏差、*t*検定の結果をTable 2に示した。日本文化との接触とアメリカ文化との接触において時期間に有意差がみられ、同エスニシティからのサポートにおいて傾向差がみられた。出国前に比べて、帰国後に、日本文化との接触と同エスニシティからのサポートは多く、アメリカ文化との接触は少なかった。なお、時期間に適応の差は確認できなかった。

要因間の相関関係をTable 3に示した。滞在中のアメリカ適応には、滞在中のアメリカに対する感情的評価と異エスニシティからのサポートの2変数が関連していた。帰国後の日本再適応には、帰国後の日本文化との接触が関連する傾向にあった。

適応の規定因 各時期の適応を目的変数とし、仮定された影響要因を説明変数とし、時期ごとに重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。8つの要因（同エスニシティとの接触、異エスニシティとの接触、日本文化との接触、アメリカ文化との接触、同エスニシティからのサポート、異エスニシティからのサポート、日本に対する感情的評価、アメリカに対する感情的評価）を説明変数とし、滞在中のアメリカ適応を目的変数とする重回帰分析の結果、決定係数は有意であった（ $R^2 = .57$, $Adj-R^2 = .51$, $p < .01$ ）。アメリカに対する感情的評価（ $\beta = .64$, $p < .01$ ）と同エスニシティからのサポート（ $\beta = .43$, $p < .05$ ）が、滞在中のアメリカ適応に正の影響を示した。

しかし、8つの要因に前時期の適応（滞在中のアメリカ適応）を加えた9つの要因を説明変数とし、帰国後の日本再適応を目的変数とする重回帰分析の結果からは、有意な決定係数を得ることはできなかった。

Table 1 滞在中に関する質問項目

| 変数 | 項目内容 | <回答段階> |
|-------------------------|---|---|
| 適応 | アメリカにいた時、勉強（仕事）を続けていく能力に自信がなかった | |
| | アメリカにいた時、学校の勉強（職場の仕事）は、楽しくなかった | |
| | アメリカにいた時、授業（仕事）で、英語「日本語」で討論したりすることがうまくできなかった | |
| | アメリカにいた時、英語「日本語」の授業（仕事）の内容が理解できなくてイライラしていた | |
| | アメリカにいた時、 <u>アメリカ人「日本人」</u> の挨拶や礼儀が分からなくて困ることがあった | |
| | アメリカにいた時、 <u>アメリカ人やアメリカ社会「日本人や日本社会」</u> の価値観が理解できなくて困ることがあった | |
| | アメリカにいた時、何でも話せる日本人「帰国子女」の友人がいなかった | |
| | アメリカにいた時、何でも話せるアメリカ人「帰国子女ではない日本人」の友人がいなかった | |
| | アメリカにいた時、何となく不安になることがあった | |
| | アメリカにいた時、感情の変化が激しかった | |
| アメリカ「日本」での住まいの住み心地は悪かった | | |
| アメリカ「日本」の気候は耐え難かった | | |
| | < “非常にそうだった(4点)” から “まったくそうでなかった(1点)” の4段階評価 > | |
| 同エスニシティとの接触 | アメリカにいた時、 <u>日本人「帰国子女」</u> との交流はどの程度ありましたか | < “非常に多かった(4点)” から “非常に少なかった(1点)” の4段階評価 > |
| 異エスニシティとの接触 | アメリカにいた時、 <u>アメリカ人「帰国子女ではない日本人」</u> との交流はどの程度ありましたか | < “非常に多かった(4点)” から “非常に少なかった(1点)” の4段階評価 > |
| 日本文化との接触 | アメリカにいた時、日本文化（J-POP・邦画・和書など）との接触はどの程度ありましたか | < “非常に多かった(4点)” から “非常に少なかった(1点)” の4段階評価 > |
| アメリカ文化との接触 | アメリカにいた時、アメリカ文化（洋楽・洋画・洋書など）との接触はどの程度ありましたか | < “非常に多かった(4点)” から “非常に少なかった(1点)” の4段階評価 > |
| 同エスニシティからのサポート | アメリカにいた時、 <u>アメリカ人「日本人」</u> と付き合う場合の行動や態度について、周囲の日本人「帰国子女」は、どの程度相談にのってくれましたか | |
| | アメリカにいた時、あなたが落ち込んだり、悩んだり、イライラしたとき、周囲の日本人「帰国子女」は、どの程度相談にのってくれましたか | < “非常によく相談にのってくれた(4点)” から “ほとんど相談にのってくれなかった(1点)” の4段階評価 > |
| 異エスニシティからのサポート | アメリカにいた時、 <u>アメリカ人「日本人」</u> と付き合う場合の行動や態度について、周囲のアメリカ人「帰国子女ではない日本人」は、どの程度相談にのってくれましたか | |
| | アメリカにいた時、あなたが落ち込んだり、悩んだり、イライラしたとき、周囲のアメリカ人「帰国子女ではない日本人」は、どの程度相談にのってくれましたか | < “非常によく相談にのってくれた(4点)” から “ほとんど相談にのってくれなかった(1点)” の4段階評価 > |
| 日本に対する感情的評価 | アメリカにいた時、あなたは日本人・日本文化に対して好感を持っていましたか | < “好感を持っていた(5点)” から “好感を持っていなかった(1点)” の5段階評価 > |
| アメリカに対する感情的評価 | アメリカにいた時、あなたはアメリカ人・アメリカ文化に対して好感を持っていましたか | < “好感を持っていた(5点)” から “好感を持っていなかった(1点)” の5段階評価 > |

注1 アメリカ滞在中に関する項目には「アメリカにいた時」の語句を質問文の冒頭に置き、質問項目の当該時期を明確にした。同様に、帰国後に関する項目には「日本帰国後」の語句を質問文の冒頭に置いた。

注2 帰国後に関する項目については、下線部分の「英語」「アメリカ人」「アメリカ社会」「日本人」などを、[]内の「日本語」「日本人」「日本社会」「帰国子女」などに修正した。

Table 2 各変数の得点と *t* 検定結果

| | 滞在中 | | | 帰国後 | | | <i>t</i> 値 |
|----------------|----------|----------|-----------|----------|----------|-----------|------------|
| | α | <i>M</i> | <i>SD</i> | α | <i>M</i> | <i>SD</i> | |
| 同エスニシティとの接触 | — | 3.18 | 0.64 | — | 3.06 | 0.97 | 0.40 |
| 異エスニシティとの接触 | — | 2.76 | 0.90 | — | 3.06 | 0.97 | -0.89 |
| 日本文化との接触 | — | 2.53 | 1.01 | — | 3.47 | 0.62 | -2.99 ** |
| アメリカ文化との接触 | — | 3.29 | 0.69 | — | 2.59 | 0.94 | 3.43 ** |
| 同エスニシティからのサポート | .84 | 3.00 | 0.75 | .56 | 3.47 | 0.62 | -2.06 † |
| 異エスニシティからのサポート | .84 | 2.88 | 0.55 | .55 | 3.12 | 0.70 | -1.46 |
| 日本に対する感情的評価 | — | 4.06 | 1.09 | — | 3.82 | 1.19 | 1.46 |
| アメリカに対する感情的評価 | — | 4.35 | 0.86 | — | 4.06 | 0.97 | 1.43 |
| 適応 | .85 | 2.81 | 0.53 | .89 | 2.95 | 0.59 | -0.78 |

注1 $df = 16$, ** $p < .01$, † $p < .10$

考 察

本研究では、小島・深田（2011）が用いたデータに比べて、質的により優れたデータを用いて、帰国子女の適応と適応の規定因について再検討した。その結果、滞在中のアメリカ適応と帰国後の日本再適応には差がなかった。また、滞在中のアメリカ適応にアメリカに対する感情的評価と同エスニシティからのサポートが影響することを確認することができたが、帰国後の日本再適応に影響する要因を見いだすことはできなかった。アメリカ適応に影響を示したのは同エスニシティからのサポートであったが、異エスニシティからのサポートもアメリカ適応と関連しており、アメリカ適応に対するサポートの重要性が窺えた。

滞在中より帰国後の適応において、帰国子女は優れていることを示した小島・深田（2011）を支持するような結果は得られず、Gullahorn & Gullahorn（1963）、Martin（1984）、箕浦（1988）が指摘するような滞在中の適応より帰国後の再適応の難しさを支持するような結果も得られなかった。本研究と先行研究との結果の違いは、帰国後の母国での滞在期間の長さによるものと推測された。前にも述べたように、帰国後の平均滞在期間が約 18 年経過している小島・深田（2011）の帰国子女は、Gullahorn & Gullahorn（1963）の②不満、絶望、混乱の時期を終え、③確信や満足の時期にいと推測される。しかし、本研究の帰国子女の帰国後の平均滞在期間は約 5 年であり、箕浦（1988）の言う“本質的な違い”が意識され出してから間もない頃であり、②不満、絶望、混乱の時期にいと推測される。したがって、帰国後の滞在期間の違いにより、小島・深田（2011）の研究と本研究の結果が異なると解釈される。

小島・深田（2011）の対象者の平均年齢は 36.1 歳、出国時の平均年齢は 13.4 歳、帰国時の平均年齢は 17.9 歳、海外での平均滞在期間は約 4 年半、帰国後の平均滞在期間は約 18 年であった。これに対して、本研究の対象者の平均年齢は 22.9 歳、出国時の平均年齢は 10.2 歳、帰国時の平均年齢は 17.9 歳、海外での平均滞在期間は約 8 年、帰国後の平均滞在期間は約 5 年であった。本研究と小

Table 3 変数間の相関関係①

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
|-------------------|--------|-------|-------|--------|------|--------|---------|--------|
| <u>滞在中</u> | | | | | | | | |
| 1 同エスニシティとの接触 | | | | | | | | |
| 2 異エスニシティとの接触 | -.47 † | | | | | | | |
| 3 日本文化との接触 | .63 ** | -.27 | | | | | | |
| 4 アメリカ文化との接触 | -.41 † | .32 | -.33 | | | | | |
| 5 同エスニシティからのサポート | .46 † | .09 | .41 † | -.24 | | | | |
| 6 異エスニシティからのサポート | -.39 | .57 * | -.05 | .27 | .34 | | | |
| 7 日本に対する感情的評価 | .07 | -.05 | .08 | -.44 † | .00 | -.09 | | |
| 8 アメリカに対する感情的評価 | -.35 | .51 * | .13 | .24 | -.05 | .43 † | .31 | |
| 9 アメリカ適応 | -.13 | .37 | .36 | .24 | .40 | .53 * | .00 | .62 ** |
| <u>帰国後</u> | | | | | | | | |
| 10 同エスニシティとの接触 | -.12 | .30 | .22 | -.12 | .00 | .07 | .35 | .57 * |
| 11 異エスニシティとの接触 | .08 | -.05 | -.10 | .16 | .34 | .01 | -.06 | -.10 |
| 12 日本文化との接触 | .09 | -.23 | -.22 | -.49 * | .20 | -.01 | .32 | -.21 |
| 13 アメリカ文化との接触 | -.39 | .39 | -.02 | .49 * | -.40 | .02 | .03 | .50 * |
| 14 同エスニシティからのサポート | -.14 | .43 † | -.07 | .17 | .07 | .17 | -.04 | .25 |
| 15 異エスニシティからのサポート | .02 | .15 | -.05 | .45 † | .30 | .45 † | -.22 | .24 |
| 16 日本に対する感情的評価 | .04 | .08 | .14 | -.55 * | .18 | .11 | .83 *** | .25 |
| 17 アメリカに対する感情的評価 | -.32 | .59 * | -.03 | .16 | .30 | .61 ** | .00 | .57 * |
| 18 日本再適応 | .23 | -.20 | -.07 | -.11 | .34 | -.17 | .51 * | .09 |

注1 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 3 変数間の相関関係②

| | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
|-------------------|-------|--------|------|---------|--------|-------|-------|-----|------|
| <u>滞在中</u> | | | | | | | | | |
| 1 同エスニシティとの接触 | | | | | | | | | |
| 2 異エスニシティとの接触 | | | | | | | | | |
| 3 日本文化との接触 | | | | | | | | | |
| 4 アメリカ文化との接触 | | | | | | | | | |
| 5 同エスニシティからのサポート | | | | | | | | | |
| 6 異エスニシティからのサポート | | | | | | | | | |
| 7 日本に対する感情的評価 | | | | | | | | | |
| 8 アメリカに対する感情的評価 | | | | | | | | | |
| 9 アメリカ適応 | | | | | | | | | |
| <u>帰国後</u> | | | | | | | | | |
| 10 同エスニシティとの接触 | .22 | | | | | | | | |
| 11 異エスニシティとの接触 | .24 | -.54 * | | | | | | | |
| 12 日本文化との接触 | -.20 | -.15 | .37 | | | | | | |
| 13 アメリカ文化との接触 | .10 | .37 | -.25 | -.71 ** | | | | | |
| 14 同エスニシティからのサポート | -.07 | .42 † | -.10 | -.20 | .62 ** | | | | |
| 15 異エスニシティからのサポート | .16 | -.01 | .17 | .01 | .17 | .51 * | | | |
| 16 日本に対する感情的評価 | .00 | .39 | -.26 | .37 | -.18 | -.18 | -.24 | | |
| 17 アメリカに対する感情的評価 | .49 * | .26 | -.07 | -.05 | .17 | .21 | .50 * | .23 | |
| 18 日本再適応 | .13 | .10 | .41 | .47 † | -.38 | -.30 | -.09 | .38 | -.12 |

注1 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

島・深田（2011）の研究では，帰国時の年齢に大きな差はないが，調査時の年齢，出国時の年齢，海外での滞在期間，帰国後の母国での滞在期間に大きな違いがある。帰国後の母国での滞在期間を含むこれらの相違点から，小島・深田（2011）の研究と本研究の結果が異なっても推測できる。

本研究では，帰国してからの滞在期間の影響を統制したデータを用いて，帰国子女の適応と適応の規定因について検討することで，小島・深田（2011）の研究より精度の高い研究結果を得ることを試みた。その結果，調査時の年齢，出国時の年齢，海外での滞在期間，帰国後の母国での滞在期間によって，研究結果は異なることが示唆された。グッドマン（2003）は，時代の変化と共に帰国子女の捉え方も変化することを指摘しており，帰国子女が珍しくなくなった現代の帰国子女についてより詳細に検討するためにも，縦断的研究を実施し，“生”のデータを得ることが望ましいだろう。また，本研究で検討されなかった他の影響要因についても検討する必要がある。

引用文献

江渕一公（1988）. 帰国子女のインパクトと日本の教育—「帰国児を生かす教育」の視点から— 社会心理学研究, **3**, 20-29.

外務省領事局政策課（2010）. 海外在留邦人数調査統計—平成 22 年速報版— 外務省領事局政策課

グッドマン, R. (2003). 「帰国子女」論争—過去 40 年間の概観— 岩崎信彦・C. ピーチ・宮島 喬・R. グッドマン・油井清光（編）海外における日本人，日本のなかの外国人—グローバルな移民流動とエスノスケープ— 昭和堂 pp. 206-223.

Gullahorn, J. T., & Gullahorn, J. E. (1963). An extension of the U-curve hypothesis. *Journal of Social Issues*, **19**, 33-47.

小島奈々恵・深田博己（2011）. 帰国子女の母国適応とホスト国適応—適応プロセスを追って— 留学生教育, **16**, 89-98.

Martin, J. N. (1984). The intercultural reentry: Conceptualization and directions for future research. *Intercultural Journal of Intercultural Relations*, **8**, 115-134.

箕浦康子（1988）. 日本帰国後の海外体験の心理的再編成過程—帰国者への象徴的相互作用論アプローチ— 社会心理学研究, **3**, 3-11.

文部科学省（2004）. 文部科学統計要覧 国立印刷局

文部科学省（2010）. 文部科学統計要覧 日経印刷株式会社